

特集：卒業

生物学類学生表彰を受賞して ―続・表紙画解説「愛がなくちゃね。」―

遠藤 愛（筑波大学 生物学類 4 年）

表彰いただきありがとうございます。卒研発表会要旨集の表紙画に込めた、4年間の感謝の想いを改めて綴ってみました。

データに変換して、愛でること

もともと私は生態学が勉強したくて、生物学類を志望しました。ヒステリックに「多様性！保全！」と言うのが嫌で、多様性とは何かということ勉強したかったのです。けれど実験や実習で、生態学のリアルな姿を目の当たりにし、戸惑ってしまいました。生物の生き様をつぶさに記述する、古典的な動物行動学に対し、今の生態学はまず生物の生き様を膨大なデータに変換して、統計処理によって、その一面を切り取っているように感じました。そのデータの海でもがく作業が、実際の生き物から離れているように感じたのです。

卒研を経た今となつては、この作業がどんな研究でも共通する大切なものだ分かります。薬剤処理にしる、遺伝解析にしる、生き物を材料に地道なデータを採り続けることで、ようやく生物に科学的に触れることが出来るのです。

データの海を泳げるようになった先に、見えてくる面白さがあるのでしょう。それはただ目の前の生き物をペット感覚で眺めているのでは見えてこない世界なのではないかと思います。生物を実験で「いじくる」過程は時に残酷にも思えます。けれど生物をデータに変換して客観的に見つめるということ、これこそが生物学類生に相応しい、生物の愛し方だと思うのです。

生物の、胸かきむしるほどの可愛さ

しかし生物は可愛い。シャーレの中をくるくる回転しながら泳ぎ回る、ヒトデのビピンナリア幼生の可愛さを、一人でも多くの人と共有したいものです。生物学類のすてきなところは、生き物のマニアックな可愛さを多くの人とシェアできるところです。餌をばくつくアカハライモリは言わずもがな、実体験でみるツクシの胞子嚢もいとをかし。ゾウリムシがシャーレの壁に突進し、学習してゆくさまなど感動すら覚えます。この感動をどう伝えようか、どんな絵を描こうかとそんなことを日々考えています。

学類に入って始めて、標本をつくることに快感を感じる人と出会いました。彼らの冷凍庫はお化け屋敷です。彼らの押入れは服を収納するところではありません。乾燥キノコやら貝殻やらエタノール瓶が詰まっているのです。もう慣れてしまいました。彼らは標本にすることで、生物の生き様を学術的価値のある記録とすることで、更にそれを自分の専有物にすることで、生物を愛しているのです。

生物をスケッチや写真や標本という形で表現を試みる。これも生物学類生に許された、生き物の愛し方だと思うのです。

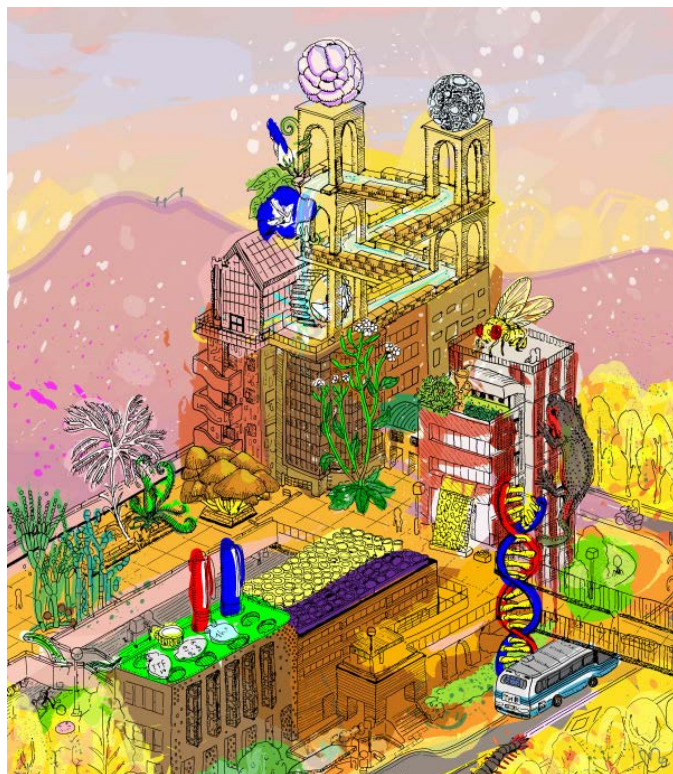
生物だけに許される、究極の愛情表現

実験・実習の魅力のひとつに「美味しさ」がありました。スケッチした後の生物を皆で頂くのには、背徳感のある喜びがあります。生殖戦略に感謝しながら、果実をほおばりました。固定されたカエルを何とかして食べようとしていた猛者もいました。昆虫食に目覚め、「セミは美味」と言いかけたあの人も思い出します。

私自身は大学構内のマテバシイを拾ってきて、研究室でどんぐりクッキーを焼きました。実に、食べることは生物と向き合うことであります。これは本当にマテバシイなのだろうか、灰汁の成分とは何だろうか、灰汁の生物学的意義とは？美味しいゴールがあると、知的好奇心もふつつつ湧いてきます。ギンナンの果皮を剥きながら、ギンナンの生殖について熱く議論したのも良い思い出です。みんな好き嫌いせず食べましょう。私は一人暮らしを始めてから、茄子と南瓜と辣油を克服しました。大学生活で一番成長したことかもしれません。身近な生き物の存在を見だし、感謝しながらその命をいただくということ。これこそが生物学類生が忘れてはならない、生物の愛し方だと思うのです。

研究のはじまるころ

愛し方は人それぞれ。そんな生物は日常と地続きの「ちょっと不思議」だと思っています。その存在を見だし、思いを馳せることが研究のはじまりだとするなら、愛がなくちゃね。



Communicated by Takeo Hama, Received April 1, 2014.